

# 捕食者なき世界

Where the wild Things were



タイトル	「捕食者なき世界」
原題	Where the wild things were Life, Death, and Ecological Wreckage in Land of Vanishing Predators
著者	ウィリアム・ソウルゼンバーグ (William Stolzenburg)
訳者	野中 香方子
出版社	文藝春秋
発売日	2010年9月15日
ページ数	357p

迫力ある表紙の写真、何だろうと思っている人はいませんか。この迫力ある頭蓋骨の写真は、じつは、絶滅して久しい「剣歯虎」といわれる「サーベルタイガー」(スミロドン)のものです。

本書の原題は、「Where the Wild Things Were」ですが、これはモーリス・センダックの絵本「Where the Wild Things Are」(かいじゅうたちのいるところ)のもじりですが、Are が Were と過去形になっているのには意味があるわけです。

食うものと食われるもの、捕食者 (Predator: このような題名の恐ろしい映画がありましたね) と被捕食者の関係が及ぼす範囲は十分に解明されているわけではありません。

本書は、生態系の維持に、捕食動物が果たしてきた役割と半世紀以上前から世界各地で進められてきた捕食に関する研究について著者(ウィリアム・ソウルゼンバーグ)がまとめたものです。

著者は、サイエンスライターとして、長年にわたり「捕食動物の管理」と「絶滅危惧種の保護」について調査し、それらに関する記事を書いており、本書が初めての著書です。

原書は、2008年に出版されたもので、編集者は「ハチはなぜ大量死したのか」(原題 Fruitless Fall)を手掛けた人物です。「ハチはなぜ大量死したのか」を読んでも判るように、生態系のバランスを崩すと思いがけない悪影響が出るという意味で両作品は共通しています。人間中心の論理を進めていくと、必ず大きなしっぺ返しがかかる。それは対象が凶暴な肉食獣であっても、小さなハチで

あっても変わらないというものです。捕食者がいなくなると生態系が如何にもろく崩れていくかを、事実を積み上げながら解き明かしてくれます。

さて、1960年、ミシガン大学の動物学部に所属する三人の科学者、ネルソン・G・ヘアストン、フレデリック・E・スミス、ローレンス・B・スロボトキンが「群衆構造、個体群制御および競争」という、後に騒動を巻き起こすことになる論文を書いています。それは論理的考察を5ページにまとめたもので、「アメリカン・ナチュラリスト」誌に発表されました。この論文は何度も引用され、議論されたので、執筆者は、彼らの名前の頭文字(Hairston, Smith, Slobotkin)をとって、これをひとまとめにしてHSSと呼ばれ、仮説の方は「緑の世界」仮説と言われるようになりました。

すなわち、この世界が緑なのは、草食動物が全ての植物を食べつくすことがないからだ。そして草食動物がこの世界を土だけの世界に変えてしまわないようにしているのは捕食者だというのがHSSらの基本的な考え方なのです。

この考えは、この後、本書のいたるところで顔を出します。

1926年、米国で100年にわたって繰り広げられた大規模な捕食動物駆逐作戦によって、二頭がイエローストーンの最後のオオカミとなります。すなわち、全くオオカミのいない世界が実現したわけです。

野生動物管理の父と言われるアルド・レオポルドが新米森林管理官だった頃、銃弾を浴びせたオオカミの死を看取ったことを回想している所があります。「年老いたオオカミに近づいてみると、瞳の奥で獐猛な緑色の炎がまさに消えようとしていた。その時私は、その瞳に私の知らない何かが、オオカミと山にしか理解しえない何かが宿っていることを悟り、今に至るまで忘れられずにいる。当時はまだ若く、引き金を引きたくてうずうずしていた。オオカミが減ればシカが増える。いつそオオカミを消してしまえばハンターの天国になると考えていた。けれども、あの緑色の炎が消えるのを見て、オオカミも山も、そんな考えには同意していない事を理解した」とあります。

オオカミを駆逐してまもなく、公園局は、別の害獣の存在に気がきます。シカがイナゴのように発生し、「シカの惑星になった」とまで言われるようになりました。彼らに若芽を食べつくされた木々は枯死し、土壌が侵食され、シカが食べない植物ばかりがはびこりました。

これに対して公園局は、

- ・ 罠を仕掛けたり
  - ・ 群れを移動させたり
- それでも不十分なときは
- ・ 撃ち殺したりします。

その後40年にわたって、公園の管理者たちは時々シカの間引きをしたりしましたが、この状況は一向に改善されませんでした。

紆余曲折の末、ついにオオカミ、すなわち捕食者の再導入を真剣に考えるようになります。

8章では、イエローストーンへのオオカミの再導入等と共に、捕食者を人間の手によって再び生態系の中に戻すという壮大な実験の帰趨を追いかけています。オオカミの再導入に際しては、

- ・ オオカミの存在の是非を議論し、
- ・ 研究者がデータを出し、
- ・ 復帰のためのプロジェクトを作り、
- ・ 社会合意を形成し、

実行に移しました。ちょうど、ニクソン大統領の時代です。

日本にも、オオカミの復活を提唱するグループが活動しているという話を聞いたことがあります。行政が取り上げたという話は聞いたことがありません。

ただ、米国の凄いところは、「正しい」と判断すると一気に実行に移すということです。米国の試みは捕食者、すなわち「隣国カナダのアルバータ州のカナディアンで捕獲された6頭のオオカミ」を機械部品のように、もとに戻したわけです。もとに戻せば生態系が元通りになると考え、実行に移したわけです。

シカの食害に悩む国立公園にオオカミが放たれたわけですが、「捕食による減少に加えて、襲われる恐怖心がシカの態度を変え、森は回復しつつある」と言われています。ただ、異なる系に大型の外来生物が侵入した場合には、想定もしていなかったような事態が生じる心配があることが今後の課題として残されています。

また、シャチはあらゆる種類の大型のクジラを捕食します。昔のクジラ漁師はシャチのことを「クジラ殺し(ホエールキラー)」と呼んでいました。大規模な商業捕鯨でクジラがいなくなった結果、クジラを食べていたシャチはラッコを大量に食べるようになり、ラッコが減少します。その結果ウニが大量に増え、海の熱帯雨林と呼ばれる昆布の森がウニに食いつくされてしまいます。

この時も、ラッコが激減したのは、捕鯨によって食糧を奪われたシャチがクジラの代わりに食べたからだという仮説が学会で激しい議論を巻き起こしました。ホエールキラーという別名から思い起こされるのは、この種が毎年、海の哺乳類を大量に消費しており、その略奪の習慣が、海洋の生物群集のバランスを左右していたということです。

これも、オオカミの場合と同様の関係で、捕食者がいなくなると中間捕食者が増え、やがて彼らは餌に飢え始め、生態系が根底から崩れ始めるという本書の主張は、その影響が想像以上に幅広く、しかも深いとして、自然観の変更を迫るほどであると指摘して我々の危機感を募ります。

その他、様々な生態系において捕食者の消失がもたらした驚くべき事例や興味深い事実を沢山紹介しています。

肉食動物というのは、被食者を食べる存在としてだけでなく、被食者の行動をも抑制する存在としてより大きな働きをしていました。捕食者から解放されたことによる被食者の行動の変化は、食物連鎖の基盤を揺るがすほどの影響をもたらしているということです。

私が関わっている里山も、人間という捕食者がいることで多様性をかろうじて保っています。すな

わち、「人間が手を入れなければ崩壊する自然だ」ということが良く判ります。

「捕食者が大切なのは当たり前だ。生態系の学会では常識だ。」というのはその通りだと思いますが、そういう人達にも、科学者たちの血のにじむような努力の末に得られた多くの事実に基づいて、体系的に、しかも詳細に論じている本書を是非読んでもらって、深く理解して欲しいところです。

本書は、生物多様性が捕食ピラミッドの頂点に位置する「トップ・プレデター(頂点捕食者)」の存在によって守られて来たという仮説から、その結論とさらなる対策に行きつくまでの、多くの科学者たちの研究を紹介しています。研究者たちの仮説の設定から結論を導くまでの道程は、研究の期間も長く並大抵の努力では得られるものではなく、暗くて、長い道のりであったことが本書からもよく伝わってきます。

著者は、エピローグで「大型捕食者が消え、生物世界が不毛になる未来が迫っていることをどうしても伝えなかった。」という言葉で本書を閉じています。

本書で述べられたこと全てに同意できるわけではありませんが、これからの「人と自然との関係」を考える上で、示唆に富む一冊です。是非一読をお薦めします。

2010.12.19

---